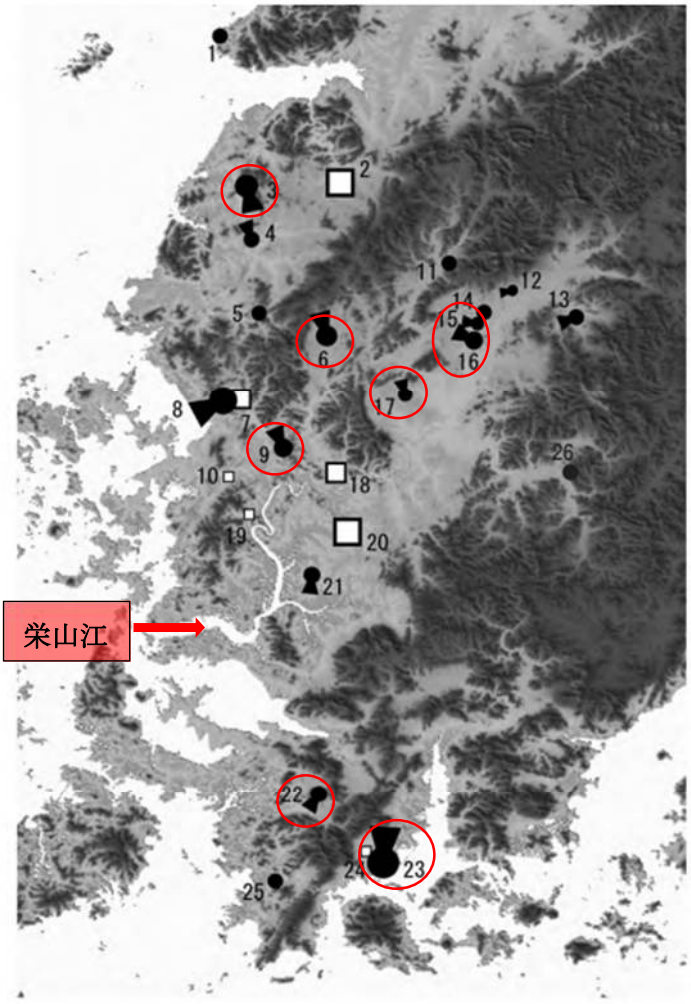
朝鮮半島の前方後円墳　～栄山江流域の古墳群を中心に～

メモ）鉄本　2023.01.07

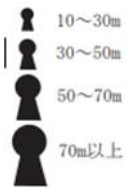
朝鮮半島で発見された前方後円墳を、かつて日本側では任那日本府と関連させて倭王権による半島経営に拡大解釈する傾向がみられ、一方、韓国では日本列島の前方後円墳は朝鮮半島から伝播したものと主張が提起された。これらは、いずれも歴史的かつ考古学的な考察を欠いた主張である。改めて「倭系古墳」の存在を両地域間の双方的な交流に視点を置きつつ、情報を整理し正しく理解する必要がある。

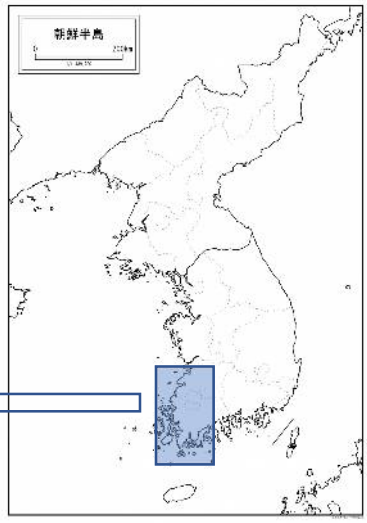
（注）「倭系古墳」とは、韓国考古学で生み出された用語で、「朝鮮半島で築かれた倭の墓制の影響を色濃く受けた古墳」のことである。現在、諸論文ではこの用語が使われている。

1. 朝鮮半島の倭系古墳の分布

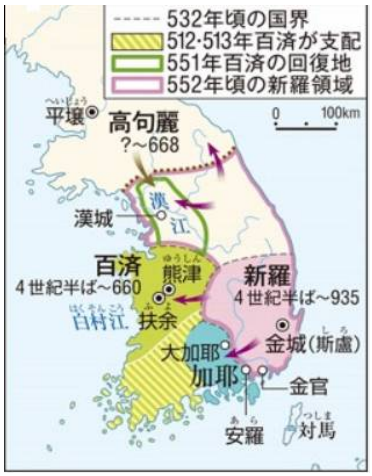


・アイコン





【6世紀前半頃の朝鮮半島】



●：前方後円墳　●：倭系・百済系の円墳　□：在地系の高塚古墳

1. 扶安竹幕洞祭祀遺跡　2. 高敞鳳德里古墳群　3. 高敞七岩里古墳群　4. 靈光月山里月桂1号墳　5. 靈光鶴丁里デチョン古墳群　6. 咸平礼德里新德1号墳　7. 咸平金山里米出古墳　8. 咸平長年里長鼓山古墳　9. 咸平杓山1号墳　10. 務安高節里古墳　11. 長城鈴泉里古墳　12. 潭陽古城里月城山1号墳　13. 潭陽聲月里月田古墳　14. 光州双岩里古墳　15・16. 光州月桂洞1・2号墳　17. 光州明花洞古墳　18. 羅州伏岩里古墳群　19. 務安九山里古墳　20. 羅州潭南古墳群　21. 靈岩泰淵里チャラボン古墳　22. 海南龍頭里古墳　23. 海南方山里長鼓峰古墳 24. 海南新月里方形葺石墳　25. 海南月松里造山古墳　26. 和順千德里懷德3号墳

栄山江流域の前方後円墳と主な在地系高塚古墳

出典：『5, 6 世紀朝鮮半島西南部における「倭系古墳」の造営背景』 高田貫太 （一部加筆）

・前方後円墳は14基

・倭系円墳は8基

【九州系石室を持つ前方後円墳】

3、6、9、15, 16、17、22、23　計8

（○で示すものが九州系石室を持つ古墳）

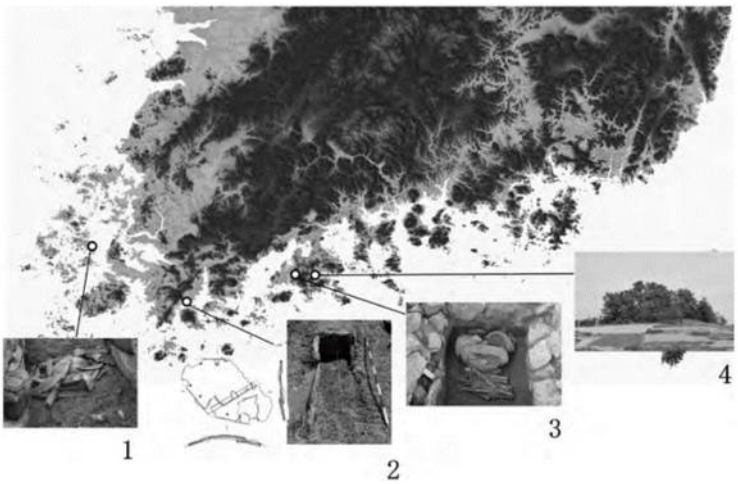
2. 朝鮮半島における「倭系古墳」の編年

朝鮮半島では、5世紀前半に西・南海岸地域において北部九州地域の墓制を取り入れた「倭系古墳」が造られ、5 世紀後半から6世紀前半にかけて栄山江流域に前方後円墳が造営された。

2．1　5世紀前半 「倭系古墳」の出現　＜朝鮮半島西南海岸地域＞

(1)朝鮮半島西南海岸地域の「倭系古墳」

	古墳名／墳形／倭系の特徴
1	新安ベノルリ 3 号墳 円墳 8×6.4m 両短壁に板石、直葬
2	海南外島 1 号墳 円墳 径 23m
3	高興野幕古墳 円墳 径 22m 竪穴式石室内部に木槨
4	高興吉頭里雁洞古墳 円墳 径 36m 埋葬施設が「羽子板」形で 壁面に赤色顔料



①4つの古墳すべてから倭系の帯金式甲冑が出土している。

②三角板革綴短甲、三角板革綴衝角付冑など倭から移入されたと思われる武器・武具類。

③特に、1と3の古墳は全体的な様相から北部九州地域における同時期の中小古墳に酷似している。

④4の古墳から出土した装身具や儀仗具は、被葬者や造営集団と百済王権との政治的関係を示している。

(2)「倭系古墳」が造られた地域の特徴

①西・南海岸地域の島嶼部であり海岸を伝う沿岸航路の要衝地

②リアス式海岸で海岸線が複雑、また、多島海地域で狭い海峡が連続する航海が難しい地域

③野幕古墳の近くの高興湾に面する微高地状には、4・5世紀代に寒東遺跡や訪士遺跡などの集落が営まれ、そこから倭系の須恵器系土器，子持勾玉などが出土。

⇒ この地域の特徴を熟知し海上交通を主たる政治経済的な基盤とした地域集団の存在が想定される。

2．2　5 世紀中頃　在地系の「高塚古墳」の造営＜栄山江流域＞

(1)「複合梯形墳」の造営：　平面楕円形もしくは台形状の低墳丘に、専用甕棺や木棺（土壙）を墳丘の主軸に沿って複数設置する形をとる古墳で、栄山江流域中枢域から他地区への拡がりを見せる。

(2)高塚古墳の造営：　特徴は、方墳が主体で同一墳丘に複数の埋葬施設を設置、また、前の時期の「複合梯形墳」の上に高塚古墳を築くという点である。高塚古墳は栄山江流域中枢域から他地区への拡がりは見せていない。

実例：羅州伏岩里3号墳の場合　（先行期）低墳丘墓の造営を行い複数の甕棺を順次埋納

（Ⅰ期）　上部に高塚墳丘を造営、並行して、九州系の石室や甕棺を造営

（Ⅱ期）　百済系の横穴式石室を追加

2．3　5世紀後半から6世紀前半　前方後円墳の出現＜栄山江上・下流域＞

(1)栄山江流域に墳丘が高大化した方墳・円墳の出現

短梯形の墳丘が次第に垂直拡張して高大化し、方形と円形の古墳が造られ、梯形墳と方墳・円墳が

併存した。埋葬施設は甕棺が中心で木棺による追送が行われた。

(2)前方後円墳が出現し、方墳・円墳・前方後円墳が併存

前方後円墳の埋葬施設は九州系と百済系の石室が存在しており、一部では甕棺を追葬している。

円墳と方墳の埋葬施設は、百済系石室と九州系石室が混合した複合型石室が造られており、次第に百済系石室の特徴を持つものが多くなる。

2．4　在地系古墳(高塚古墳)と前方後円墳の類似点と相違点　「二つの墓制が併行」

①類似点：　横穴式石室の採用、葺石や埴輪(円筒形土製品)、釘・鋌を用いた木棺

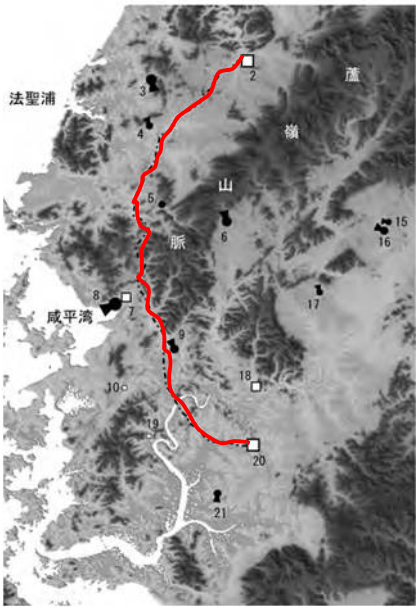
②相違点：　墳丘形態、墳丘拡張の有無、埋葬施設の数と埋葬の継続期間

3．半島・列島両地域の交流と倭系遺物

「前方後円墳を造営する集団と高塚古墳を造営する集団の政治経済的関係」

(1)交通路

羅州潘南古墳群(右図の No20)と蘆嶺山脈以北の高敞雅山面鳳徳里古墳群(右図の No2)を結ぶ交通路は、朝鮮半島西海岸沿いを走り、海から運ばれてくる様々な人や物資、技 術、情報についても容易に受け入れ、朝鮮半島と日本列島の双方向的に展開させていくことが可能であった。



(2)倭系遺物の出土分布

①埴輪(円筒形土製品:突帯の形状、透穴、タタキ調整)

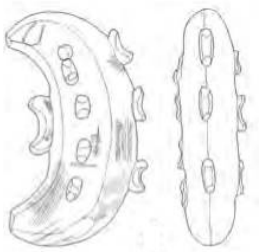
光州市月桂洞前方後円墳出土
出典:『伽耶と倭』 朴天秀

12＝全羅北道
13＝全羅南道　　5＝光州市
14＝慶尚北道
15＝慶尚南道　　2＝釜山市

光州月桂洞古墳の横穴式石室

埴輪(円筒形土製品)は在地系高塚古墳(羅州新村里9号墳など)でも確認されており、**老迪遺跡**(上記地図の★の位置)からは、住居址や堆積土中から埴輪(円筒形土製品)が13点出土している。

②須恵器系土器（杯身、璧など）・子持ち勾玉



4、5世紀代の寒東遺跡や訪土遺跡から倭系の須恵器系土器、子持勾玉などが出土。右図は訪土39－4号住居址出土の長さ5cm強の子持勾玉。栄山江流域を中心とする全羅道地域では、TK73 期～TK216 期（5C 第2四半期）に少数ながら須恵器が認められ、TK208 期（5C 第3四半期）以降、最も増加し MT15 期（6C 第1四半期）では減少する。

＜全羅道地域で確認された璧＞

TK73 期～216 期：羅州・佳興里古墳，務安・德巖 1 号墳 4 号甕棺
TK208 期：務安・麥浦里墓壙 262 採集，光州・山亭洞 16 号溝，和順・月谷里墓壙 17 採集
TK208～23 期：高敞・紫龍里 3 号墳西周溝，務安・德巖 1 号墳 7 号甕棺，務安・上馬里上馬亭古墳甕棺周辺
TK23・47 期：高敞・紫龍里 2 号墳 7-1 号土壙墓，6 号墳 1 号土壙墓，4 号墳 1 号土壙墓，高敞・鳳德方形推定古墳，長城・大德里 1 号石槨，順天出土地不明（？）
MT15 期：羅州・伏岩里 3 号墳 96 石室，伏岩里 1 号墳

出典：「百済・栄山江流域と 倭の相互交流とその歴史的役割」　中久保辰夫
国立歴史民俗博物館研究報告 第217集　2019

③土師器系土器

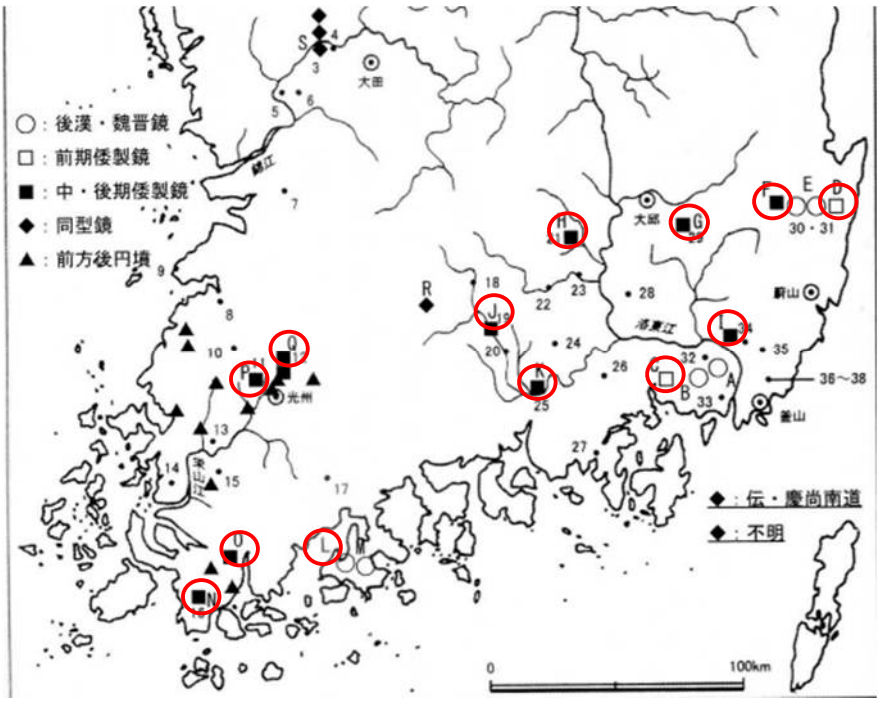
朝鮮半島東南部の16ケ所の遺跡で確認。

④倭製銅鏡（内行花文鏡系、珠文鏡系、乳脚文鏡系など15面）

副葬された年代は4世紀から6世紀前半にかけてであり、5世紀中葉から6世紀前葉のものが多くみられる。

（右図の説明）
・数字は倭系遺物分布
・○は倭製銅鏡出土地

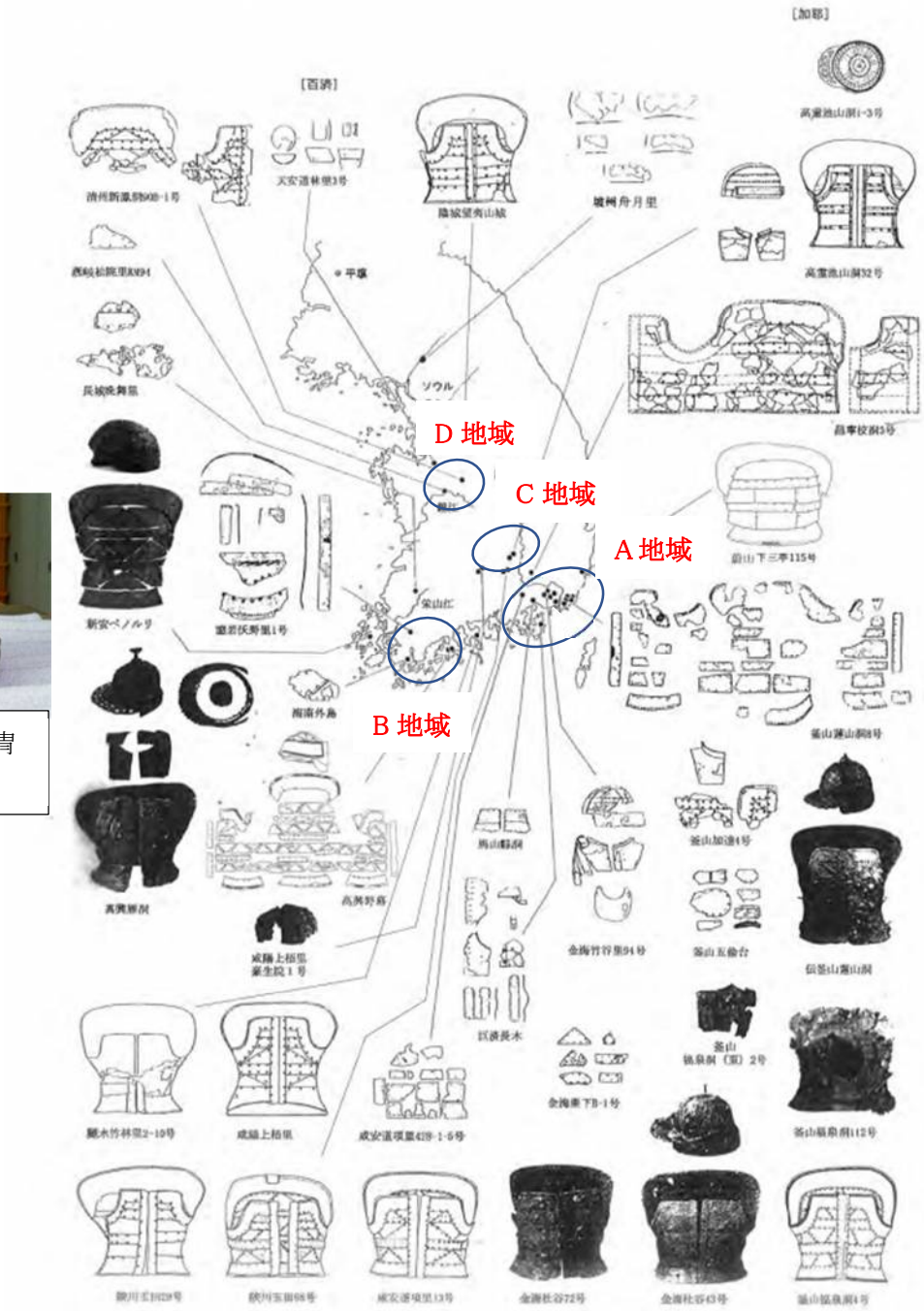
＜鏡式・出土数15面＞
・内行花文鏡系＝1
・珠文鏡＝6
・乳脚文鏡系＝1
・素文鏡＝1
・捩文鏡＝1
・弥生小型倣製鏡＝1
・旋回式獣像鏡＝3
・不明＝1



出典：『鏡の古代史』辻田淳一郎より抜粋し加筆

⑤鉄器・武具・武器

ベノルリ古墳の衝角付冑
（全羅南道沿岸部）



右図の出典:
『韓半島出土の倭系
甲冑について』
柳本照男

・出土短甲の総数は34領、型式別では方形板革綴短甲2、長方板革綴短甲5、三角板革綴短 甲 10、三角板鋲留短甲6、横矧板鋲留短甲8、型式不明3である。

・冑の総数は14領、型式別では三角板革綴衝角付冑3、三角板鋲留衝角付冑 1、横矧板鋲留衝角付冑2、小札鋲留眉庇付冑4、革併用眉庇付冑1、横矧板鋲留眉庇付 冑1、型式不明2である。

＜倭系甲冑の地域別変遷＞

	4C 中	4C 後～5C 初	5C 前～中	5C 中～後	6C
A 地区:慶尚南道	方形板	革綴短甲	革綴短甲	鋲留短甲	桂甲
B 地区:全羅南道		同上			
C 地区:慶尚北道			革綴短甲	鋲留短甲	
D 地区:忠清南道			同上	同上	桂甲

3. 倭系古墳の被葬者像

倭系古墳の被葬者像については、様々な見解があるが、大きくは「在地首長説」、「倭系百済官人説」、そして「倭人説」にまとめることができる。それぞれの研究者の見解を列挙する。

3．1　高田貫太氏の見解　**「在地首長説」**

在地系の高塚古墳と前方後円墳の2つの墓制が盛行していたが、これは対立的に存在したものではなく併存していたと捉える。栄山江流域の前方後円墳の横穴式石室、玄室内の施設物、墳丘外表施設、副葬品などの属性には、倭系要素のほかにも、百済系、在地系、そして加耶系の要素が認められる。つまり、栄山江流域の地域集団が新来の墓制を取り入れる際の主体的な取捨選択の結果である。

①羅州地域とその周辺域：在地系高塚古墳の構成要素として横穴式石室や外表施設を取り込む。

②咸平・栄山江上流域・海南半島などの外縁域：前方後円墳の諸属性をある程度総体として受容

← 百済中央や倭系渡来人集団との関わり合い方の違いが2つの墓制の様相に反映

3．2　朴天秀氏の見解　**「倭人説」・「倭系百済官人説」**

周防灘沿岸、佐賀平野東部、遠賀川・室見川・菊池川下流域などに出自をもつ複数の有力豪族で、百済王権に臣属しながら倭王権と百済王権間の外交で活躍した人物とみる。

13基の前方後円墳はいずれも在地首長墓の密集している場所を避けるようにして造られ、さながら単独墳かのように存在し、在地的な古墳系列を持たず、5 世紀末から6世紀前葉にかけて突如として現れることから、在地首長墓とは想定しがたい。

①栄山江流域の前方後円墳：多くの倭系の遺物や埋葬施設様式を取り入れ

・横穴式石室：平面長方形で平天井を呈し立 柱石と腰石を配する形態、赤色顔料の塗布

・古墳の形態：段築と葺石、盾形周溝、埴輪、木造埴輪

・副葬品：半球形装飾付捩じり環頭大刀、刃部断面三角形銀装鉄鉾、脇当など倭系の副葬品
繁根木型ゴ ホウラ製貝釧、仿製鏡、須恵器

②北部九州や対馬：栄山江流域産の土器が集中

・土器：鳥足紋土器（福岡県の番塚古墳、梅林古墳で出土）

・繁根木型ゴホウラ製貝釧：佐賀県の関行丸古墳、福岡県の櫨山古墳、熊本県の伝佐山古墳

3．3　古代の日韓交流を示す遺物例

	熊本県　江田船山古墳	全羅北道　益山市　笠店里古墳
王冠		
飾履		

【参考文献】

・『日本発掘！　ここまでわかった日本の歴史』 文化庁編　朝日新聞出版　2015

・『伽耶と倭　韓半島と日本列島の考古学』 朴天秀　講談社　2007

・『九州国際大学国際関係学論集』

「朝鮮半島南部に倭人が造った前方後円墳：古代九 州との国際交流」 朴天秀　2010

・『東アジアと倭の眼でみた古墳時代』 上野祥史編　朝倉書店　2020

・『国立歴史民俗博物館研究報告 第 211 集』

「5, 6 世紀朝鮮半島西南部における「倭系古墳」の造営背景」 高田貫太　2018

・『立命館大学紀要論文』 立命館大学人文学会　2013

「韓半島の栄山江流域における古墳展開と 前方後円形古墳の出現過程」 崔榮柱（韓民国全南大学）

・『鏡の古代史』 辻田淳一郎　角川書店　2019

・第九回百舌鳥古墳群講演会記録集 『海を渡った交流の証し』 堺市文化観光局文化部文化財課　2020

・『国立歴史民俗博物館研究報告 第217集』

「百済・栄山江流域と 倭の相互交流とその歴史的役割」　中久保辰夫　2019

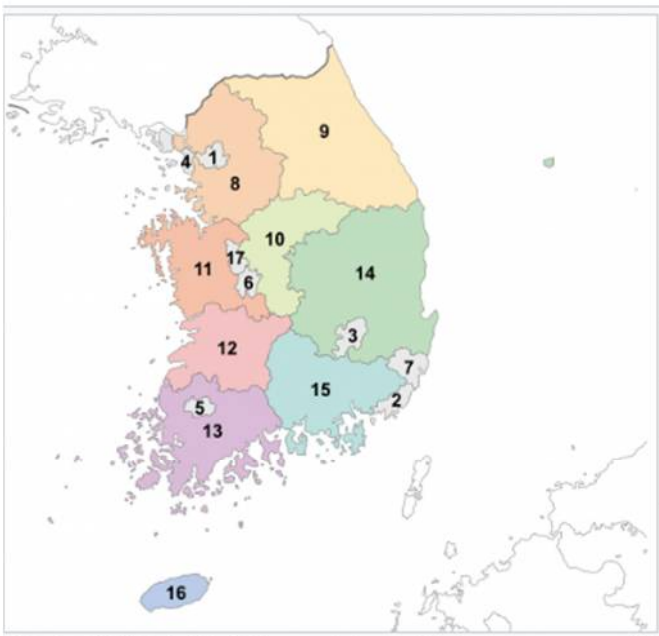
・なみはや歴史講座 『韓半島出土の倭系甲冑について』 柳本照男（元 韓国東洋大学校 教授）　2016

・　熊本大学学術リポジトリ『古墳築造域と琉球列島間におけるゴホウラ背面釧の流通について』

中村友昭（鹿児島市立ふるさと考古歴史館）

・『高興野幕古墳からみた5世紀の対外交渉』 権宅章（新羅王京核心遺跡復元整備事業推進団）

【参考】



韓国の行政区域を色分けで示した地図

	行政区域		
1	ソウル特別市	11	忠清南道
2	釜山広域市	12	全羅北道
3	大邱広域市	13	全羅南道
4	仁川広域市	14	慶尚北道
5	光州広域市	15	慶尚南道
6	大田広域市	16	済州特別自治道
7	蔚山広域市	17	世宗特別自治市
8	京畿道		
9	江原道		
10	忠清北道		